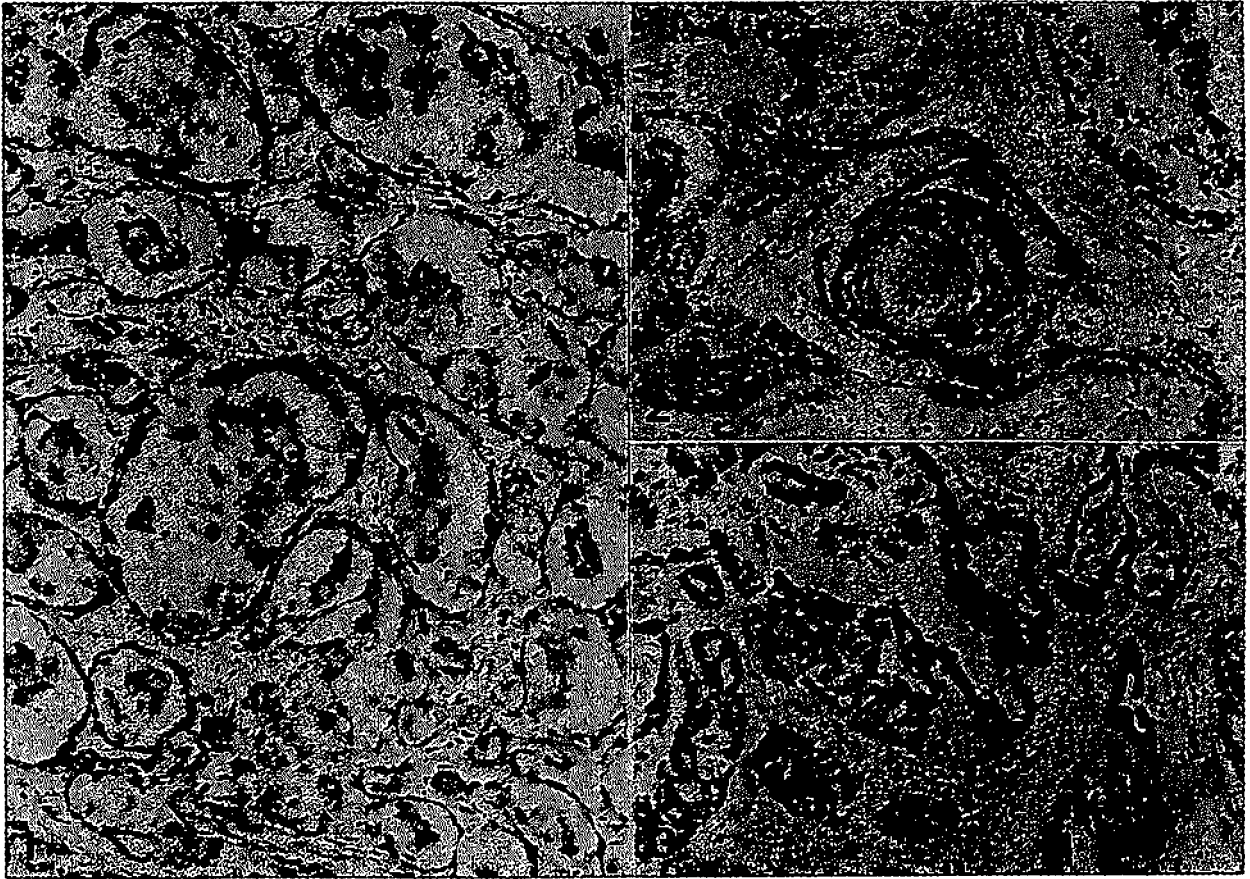


犬の肺癌

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第15回獣医病理学研修会標本 No.221



患者は下関市内に飼われていた13才の牝（卵巣割去）の雑種犬で、昭和48年3月14日、食欲不振、元気消失を主訴として某開業医に上診、下頸部腫脹、心音亢進などからフィラリア症が疑われ、4月5日には呼吸速迫、眼やに、水様鼻汁などジステンパー様の症状を示した。症状は漸次増悪、5月27日には左側横臥して呼吸困難に陥り、5月30日安楽死、その直後開業医により開胸され、胸腔内に異常を認めたため、そのまゝ病性鑑定のため当教室に提供された。

肉眼的所見：すでに胸部は大きく開かれ、胸水の貯溜状況などは不明、前縦隔部にソフトボール大の灰黄白色充実せる腫瘤が存在。胸腔臓器を連続のまゝとり出して検査すると、腫瘤は左右両肺の前葉で包まれるような状態にあり、肺もまた腫瘤に癒着しているというよりむしろその腫瘤の一部をなしているように見え、とくに右葉は明らかな限界もなく移行し、左前葉の尖端は腫瘤に挟まれた恰好になっている。またこの腫瘤は心臓とも強く癒着し気管、動脈基始部を包みこんで圧迫している。腫瘤の外観は凹凸不整、大小不同の腫瘤が癒合して一塊となり、断面をみると繊細な結合織で分割され、中心部は

失沢脆弱な壊死巣となっている。なお左肺前葉後部（拇指頭大）、左側胸肋膜（大豆大）、左腎皮質（米粒大）にそれぞれ1個ずつ限界明瞭な同質の病巣がみられた。

組織学的所見：写真1に示すような肺胞構造を思わせるような網眼を内張りしたり腔内に層状に増殖する胞体の豊かな円形、多角形乃至紡錘形の細胞が主体をなしている。このような細胞はまた索状に浸潤性に増殖するところもあり、核分割像も頻繁に認められる。また場所によっては写真2のように扁平上皮化生と思われる像が著明なところもある。さらに、それよりも小型で核の濃染する立方上皮様細胞が内張りして恰も細気管支様の構造を示したり（写真3）、巣状に増殖する像もみられる。

提出標本の部位が適切を欠いたため原発巣の推定が困難で epidermoid carcinoma の診断も下されたが、肺から連続的に同質の病変が波及している像が認められたので肺原発の上皮性腫瘍の連続蔓延と考えた。病理組織学的には alveolar carcinoma (1), squamous carcinoma (2), bronchogenic carcinoma (3) などの所見が混在するので、単に肺癌とするのが妥当であろうとの結論に達した。